

幼保小の架け橋プログラムに関する調査研究事業
成果報告書
(令和4年度～令和6年度)

機 関 名 : 袋井市

1. 事業実施の目的

＜事業実施の目的＞

本市では、子供たちの「確かな学力の育成」「体力・体格の向上」「不登校」について課題があり、それぞれの小中学校で改善に取り組んできたものの十分な成果が見られないことから、幼少期から一貫して取り組むべく、平成 29 年度から「幼小中一貫教育」を進めてきた。

このうち、就学前については、以前はほとんどの 5 歳児が公立幼稚園に通っていたが、保護者の保育を求めるニーズの増加に伴い、現在は公立園より私立園、幼児部より保育部に在園している子供が多くなっており、また、公立・私立、幼稚園・保育所・認定こども園など多様な類型の施設の下で過ごし、0 歳からの在園年数、保育と教育の違い、生活体験や学びの経験等、在籍園によって様々な違いがある。したがって、3 要領・指針で整合化が図られているとはいえ、3 つの資質・能力の育成や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についての捉え方に差異があった。

小学校については、20 園以上から入学児童を受け入れる学校が存在するなど、幼児期に育まれた資質・能力の違いに加え、特別支援や外国籍の子供への対応、幼小間の保育・教育の段差等により、小学校スタート時に登校しぶりや離席などの問題行動が見られ、円滑な接続に苦慮している現状があった。

こうしたことから、調査研究課題のキーワードを「一人一人の多様性」「すべての子供たちの円滑な接続」とし、育てたい姿を明確にするとともに、小学校との円滑な接続のため、生活体験や遊び、学びを内容とする架け橋期のカリキュラムを策定、実践し、検証と改善を重ね、市内すべての園・小学校において定着することを目的として取り組むものである。

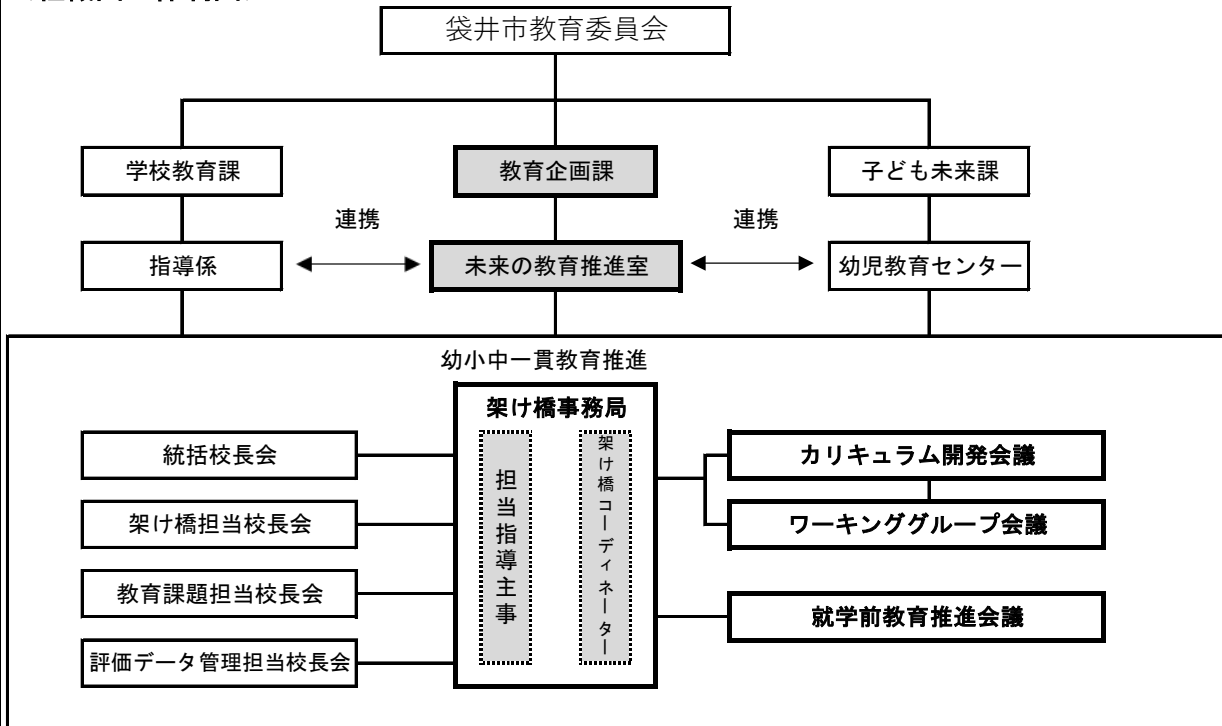
＜園・小学校の施設数等＞

	幼稚園			保育所		幼保連携型 地域裁量型		小学校		
	国立	公立	私立	公立	私立	公立	私立	国立	公立	私立
施設数		8	1		13	5	7		12	
園児・ 児童数		253	115		911	621	854		4935	

2. 事業実施に当たっての体制づくり

2-1. 組織図・体制図

<組織図・体制図>



学校・幼児教育施設（協力園・協力校）

学園名	中学校	小学校	公立園	私立園
周南たちばな学園	周南中	今井小 三川小 山名小	今井幼稚園 三川幼稚園 山梨こども園	のびやかMIRAI園・ひよこ幼稚園 袋井ハローこども園・ひだまり保育園 明和第一保育園・めいわ月見保育園
袋井あやぐも学園	袋井中	袋井西小 袋井東小 袋井北小	袋井西幼稚園・田原幼稚園 袋井東幼稚園 若草こども園 若葉こども園	明和第二保育園・めいわ可睡保育園 どんぐり保育園・袋井あそび保育園 MOE保育園てんじん園 たんぼぼ第二保育園
南の丘学園	袋井南中	袋井南小 高南小		山名幼稚園・ルンビニあゆみ園 たんぼぼ保育園・愛野こども園 子育てセンターにじいろ 愛ノ宮保育園
浅羽学園	浅羽中	笠原小 浅羽東小 浅羽北小 浅羽南小	笠原こども園 浅羽東こども園 浅羽西幼稚園 浅羽北幼稚園 浅羽南幼稚園	ルンビニこども園 ルンビニひかり園 あさば保育園

（カリキュラム開発会議）

大学教授、協力園・協力校の代表、地域の有識者、保護者代表 15 名以内で構成。事業のねらいや取組、架け橋期のカリキュラムの開発等について協議する会議体。

（ワーキンググループ会議）

学園を代表する協力園・協力校の保育者・教員で構成。架け橋期のカリキュラムの具体化を行う実務的な会議体。

（就学前教育推進会議）

市内全園・全校の教員・保育者の担当者・事務局で構成。架け橋期の事業理解や具体的な取組について、グループワークを中心に協議し、実践に生かすための合同研修を行う会議体。

（統括校長会）

4 つの学園を統括する中学校長と事務局で構成。幼小中一貫教育に関わる学園内の取組について成果や課題も交えながら協議する会議体。

（架け橋担当校長会）

4 つの学園の架け橋担当校長と公立園長代表、私立園長代表と事務局で構成。学園における架け橋期の取組について成果や課題も交えながら協議する会議体。

<体制づくりの進め方>

本調査研究は、令和 4 年度に幼児教育・保育所担当である子ども未来課の幼児教育センターが中心となり、学校教育課の指導係や、教育企画課の未来の教育推進室と連携を図りながら事業を推進した。

当初は、協力園や協力校を中心に事業のねらいの理解やカリキュラムの作成、実証に取り組んできた。しかし、市内全幼児教育施設・全小学校での事業を推進するためには、学園としての取組を位置づけ実証していくことが不可欠であると判断し、最終令和 6 年度は、教育企画課の未来の教育推進室を中心に、学校教育課・子ども未来課と連携しながら幼小中一貫教育を推進する中で、調査研究を進めた。

事業推進の主体は、架け橋期のコーディネーター・幼小中一貫教育担当指導主事が、子ども未来課の指導主事や幼児教育アドバイザー、学校教育課指導主事と連携を図りながら、架け橋期のカリキュラム開発会議、ワーキンググループ会議の運営、市内全幼児教育施設・全小学校へ働きかけた。また、関係団体や保護者への理解と協力等に当たり、便りを通信アプリで発信したり取組内容を周知したりした。また、未来の教育推進室の室長が、統括校長会や架け橋担当校長会において、学園での取組の成果や課題等についての協議を深め、次年度以降の取組に向けた体制や仕組みについても準備を進めた。

2-2. 協力園・協力校

＜協力園・協力校の概要＞

設置者	設置類型等	園名・校名	幼児・児童数等	接続園・校のグループ
私立	幼保連携型 認定こども園	袋井ハローこども園	3歳 23人 4歳 21人 5歳 20人	Aグループ 周南たちばな学園
公立	幼稚園	今井幼稚園	3歳 10人 4歳 11人 5歳 19人	Aグループ 周南たちばな学園
公立	小学校	今井小学校	1年生 28人	Aグループ 周南たちばな学園
私立	保育所	明和第二保育園	3歳 18人 4歳 18人 5歳 20人	Bグループ 袋井あやぐも学園
公立	幼稚園	袋井西幼稚園	3歳 16人 4歳 22人 5歳 19人	Bグループ 袋井あやぐも学園
公立	小学校	袋井西小学校	1年生 88人	Bグループ 袋井あやぐも学園
私立	幼保連携型 認定こども園	ルンビニあゆみ園	3歳 18人 4歳 25人 5歳 24人	Cグループ 南の丘学園
私立	幼稚園	山名幼稚園	3歳 60人 4歳 60人 5歳 60人	Cグループ 南の丘学園
公立	小学校	袋井南小学校	1年生 102人	Cグループ 南の丘学園
私立	幼保連携型 認定こども園	ルンビニひかり園	3歳 17人 4歳 19人 5歳 19人	Dグループ 浅羽学園
公立	幼稚園	浅羽北幼稚園	3歳 3人 4歳 6人 5歳 10人	Dグループ 浅羽学園
公立	小学校	浅羽北小学校	1年生 45人	Dグループ 浅羽学園

＜協力園・協力校の指定プロセス＞

幼小中一貫教育の下で事業を推進することから、4つの学園（中学校区）から、それぞれ小学校1校と幼児教育施設2園を指定した。1校・2園が地理的に連携を図りやすいように、小学校と幼児教育施設が隣接するところや、指定する小学校区にある園を選定し、協力を依頼した。南の丘学園については、令和4年度から学園内に公立園がなくなったため、私立幼稚園と私立認定こども園の2園を指定した。

＜自治体と協力園・協力校の連携・協働の取組＞

協力園・協力校の管理職や教員・保育者が、カリキュラム開発会議やワーキンググループの会議のメンバーとして、カリキュラムの作成や実証に関わることで、自治体と協力園・協力校が施策の理解や成果・課題を共有し、一体となって事業を推進した。また、架け橋期のコーディネーターが、協力園・協力校において事業理解のための研修を実施した。さらに、幼児教育アドバイザーと共に、協力園・協力校を訪問し、日常の保育や教育、交流活動や教職員の連携事業の様子を参観して、進捗状況を把握したり教員・保育者へ助言をしたりした。

＜協力園と協力校同士の連携・協働の取組＞

事業を指定する以前から小学校と公立園間では、交流活動が行われているところが多かった。協力園・協力校における架け橋期のコーディネーターによる研修において、5歳児と1年生、さらに、5歳児と5年生、5歳児同士の交流や小学校での授業参観・体験の充実、教職員による互いの教育・保育の参観・体験を呼び掛けた。また、就学前教育推進会議において、小学校区ごとのグループで連携に関わる事業についての打ち合わせや情報共有を図ることで、私立園も交えて協力園・協力校同士の縦のつながりや横の連携が深まった。

2－3. 協力団体等

<協力団体等の概要>

団体等名	団体等の活動概要
校長会	小中学校の校長で組織され、情報交換や研修、学校教育に係る活動を通して、学校教育全体の質の向上を目指す。
公立園長会	市内の公立園長で組織され、市の教育方針を受け、その実現に取り組む。
私立園長会	私立の保育園長・こども園長等で組織され、大きな保育の方向性や情報交換を行う中で、保育全体の質の向上を目指す。

<各協力団体等との連携>

校長会、公立園長会、私立園長会の定例会議に参加した。令和4年度には、架け橋事業の周知や理解・協力を依頼した。その後は随時、進捗状況や成果・課題について具体例も交えながら報告した。さらに、架け橋担当校長会には、公立園長・私立園長の代表に参加いただき、事業の充実に向けて積極的に意見をいただいた。

２－４．架け橋期のコーディネーター等

＜架け橋期のコーディネーター等の概要＞

新規／継続	事業に関わった 年度	役職名	経歴
新規	令和４～６年度	架け橋期のコーディネーター	元公立小学校長
新規	令和４年度	架け橋期のコーディネーター	元公立園長
新規	令和５年度	架け橋期のコーディネーター	元公立園長、指導主事
新規	令和６年度	架け橋期のコーディネーター	元中学校長、幼小中一貫教育推進者

＜架け橋期のコーディネーター等の役割等＞

コーディネーターの任命に当たっては、公立園や小学校での豊富な勤務経験や本市における学園を中心とした幼小中一貫教育の推進に携わっていた者を選定した。

コーディネーターには、教育委員会内の指導主事や幼児教育アドバイザーと連携を図りながら、架け橋事業の推進役となることを期待した。業務としては、①園・小学校の教員・保育者への事業の理解促進・研修実施、②カリキュラムの開発に関わる会議の運営、③園・小学校への訪問による架け橋期の保育・教育の状況把握や助言、④交流・体験事業や教職員の連携事業の推進、⑤教員・保育者や保護者・関係機関への情報発信などを担った。

コーディネーターが、事業の推進初期から、私立を含む全ての園や小学校を度々訪問し、保育・教育の様子を参観したり教員・保育者と情報交換をしたりすることで、園と小学校、自治体（事務局）間のつなぎ役となり、早期に事業への理解や協力を得ることができた。カリキュラムに基づく保育・教育について、カリキュラム開発会議やワーキンググループ会議に委員が参加している協力園・協力校以外の園・校の教員・保育者は、実践状況が掴みにくかった。そこで、コーディネーターが進捗状況を、定例の園長会や校長会、就学前教育推進会議等において積極的に報告し、市全体の取組となるように努めた。

３． 架け橋期のカリキュラム開発会議

３－１． 会議委員等

<会議委員一覧>

会議の代表者氏名		田宮 縁	他 18 名（実人数）
会議委員氏名	所属機関 所属・職名	具体的な役割分担	従事期間
田宮 縁	静岡大学教授	会議の代表者 全体的な指導・助言	令和４年４月～７年３月
河野みゆき	山名幼稚園 副園長	南の丘学園私立幼稚園代表 WG メンバー	令和４年４月～７年３月
野中 徹	ルンビニあゆみ こども園 園長	南の丘学園私立こども園代表 カリキュラム検討	令和４年４月～７年３月
田中千博	袋井南小学校 主幹教諭	南の丘学園小学校代表 WG メンバー	令和４年４月～６年３月
安間啓子	袋井ハローこども園 教頭	周南たちばな学園私立こども園代表 WG メンバー	令和４年４月～７年３月
三浦善友	今井小学校 校長	周南たちばな学園小学校代表 カリキュラム検討	令和４年４月～６年３月
藤下恵里	袋井西小学校 主幹教諭 袋井南小学校 教頭	袋井あやぐも学園小学校代表 WG メンバー 南の丘学園小学校代表 カリキュラム検討	令和４年４月～７年３月
鈴木尚美	ルンビニひかり 園 園長	浅羽学園私立こども園代表 カリキュラム検討	令和４年４月～７年３月
安間史恵	浅羽北幼稚園 教頭	浅羽学園公立幼稚園代表 WG メンバー	令和４年４月～５年３月
速水二葉	浅羽北小学校 校長	会議の副代表 浅羽学園小学校代表 WG メンバー	令和４年４月～７年３月
田村 学	國學院大學 教授	架け橋期のカリキュラム開発会議アドバイザー	令和４年４月～６年３月
鈴木一慶	袋井東幼稚園 PTA 会長	保護者代表 カリキュラムへの意見	令和４年４月～５年３月
角川重晴	地域の有識者	元小学校長・幼稚園長 カリキュラムへの意見	令和４年４月～７年３月
雪島こず江	地域の有識者	元小学校長 カリキュラムへの意見	令和４年４月～７年３月
鈴木 豪	袋井西小学校 主幹教諭	袋井あやぐも学園小学校代表 WG メンバー	令和５年４月～７年３月
平川悦子	浅羽北幼稚園 教頭	浅羽学園公立幼稚園代表 WG メンバー	令和５年４月～６年３月

高柳招寛	浅羽西幼稚園 PTA 会長	保護者代表 カリキュラムへの意見	令和5年4月～7年3月
金原辰夫	今井小学校 校長	周南たちばな学園小学校代 表 カリキュラム検討	令和6年4月～7年3月
河上智華子	袋井西幼稚園 園長	袋井あやぐも学園公立幼稚 園代表 カリキュラム検討	令和6年4月～7年3月

＜会議委員の決定プロセス＞

カリキュラム開発会議は、本事業の推進に当たって新設した。

架け橋期の保育・教育に関しての造詣が深く、専門的な立場から指導・助言をいただくために、教育に関わる大学教授を委員として依頼した。カリキュラムの作成・検討に当たっては、本市の4つの学園の協力園・協力校の園長・校長・教頭・主幹教諭等から委員を選定した。また、公立園のPTA会長から1名を選定し、保護者代表としてカリキュラムや事業に対する意見や感想をいただいた。さらに、園長や校長の経験のある方を地域の有識者として選定し、保育・教育現場での経験を踏まえた意見をいただいた。

なお、具体的なカリキュラムの作成は、開発会議委員を兼ねるメンバーに園・小学校の教員・保育者を加えたワーキンググループ会議で進めた。

3-2. 開催実績

<開催実績>

令和4年度		
開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
7月4日 15時15分～16時45分	・ 幼保小の接続に係る現状について ・ 幼保小架け橋プログラム事業について ・ 袋井市幼保小架け橋期のカリキュラム開発会議について ・ 袋井市幼保小架け橋期のカリキュラムについて	事業の推進内容やスケジュール、既存の幼小接続カリキュラムを生かして事務局が作成した架け橋期のカリキュラムについて検討を行い、ワーキンググループにおいて詳細な内容を作成していくことが決定した。
10月12日 15時15分～16時45分	・ 講義「カリキュラム開発に係るポイント等について」 ・ 架け橋期のカリキュラムの方向性について ・ カリキュラムモデル案について ・ ワーキンググループの進捗状況について	ワーキンググループでの検討を経て作成したカリキュラムのモデル案や今後のカリキュラムの作成について検討した。袋井市としての「育ってほしい子どもの姿」を示すものと学園ごとのカリキュラムを作成する方向性を確認した。
12月8日 15時15分～16時45分	・ 袋井市「架け橋期に育ってほしい子どもの姿」（案）について ・ 学園ごとのカリキュラム作成状況について	袋井市としての「育ってほしい子どもの姿」を示す案と学園ごとのカリキュラム案について検討した。両案ともに簡略化や内容の見直しを進めることを確認した。
2月13日 15時15分～16時45分	・ 袋井市「架け橋期に育ってほしい子どもの姿」（案）について ・ 学園ごとのカリキュラムについて ・ 1年目の取組経過について ・ 次年度の取組について	市としての取組の重点や「育ってほしい子どもの姿」を記したプランの修正案と学園ごとのカリキュラムの修正案について検討した。検討した案に基づいて協力園・協力校を中心にカリキュラムを実施していくことを決定した。

令和5年度

開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
5月30日 15時～16時30分	・ 年度当初のスタートカリキュラムの様子について ・ カリキュラムの実施・検証について ・ 今後のカリキュラムの改善について	年度当初の1年生の様子について検討を行い、スタートカリキュラムにより安心した学校生活を送られていることを確認した。カリキュラムの改善については、幼児期・小学校に共通する資質・能力の3本柱に合わせていくことと、市の統合版を作成していく方向性を確認した。

7月25日 15時～ 16時30分	・ 幼保小連絡会の様子について ・ カリキュラムの改善に向けての進捗状況について ・ カリキュラムの実施・検証について ・ 架け橋事業意識アンケートについて	カリキュラムの改善に向けたワーキンググループでの進捗状況や実践事例案について検討した。カリキュラムについては、統合版と学園版の位置づけを調整する必要性を確認した。
10月20日 15時～ 16時30分	・ カリキュラムの改善に向けての進捗状況について ・ 架け橋事業意識アンケートの結果について ・ 「ステージにおいて育ってほしい子どもの姿」の修正案について	意識アンケートの結果について検討を行い、教員・保育者や保護者の回答から架け橋期の取組の浸透状況を確認した。「ステージにおいて育ってほしい子どもの姿」の修正案について、了承した。
12月8日 15時～ 16時30分	・ カリキュラムの改善に向けての進捗状況について ・ 協力園・校のエピソード記録からの検証について ・ 幼保小交流活動、教職員異校種体験について	作成を進めてきた市の統合版のカリキュラムについて検討し、一部を修正して袋井市版とすることを決定した。エピソード記録については、検証を深めるために形式を工夫することを確認した。
2月6日 15時～ 16時30分	・ 学園カリキュラムの改善案について ・ 協力園・校のエピソード記録からの検証について ・ 次年度の取組について	学園カリキュラムの改善案について検討した。提案されたカリキュラムに沿って実践し、検証を深めることを決定した。5年度の取組の成果と課題、次年度の取組についても検討し、全園・全校で実施することと最終年度の目標を確認した。

令和6年度		
開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
4月18日 9時～12時	・ こども園の5歳児の活動参観 ・ 小学校1年生の授業参観 ・ 「一人一人の多様性へ配慮した取組」「幼小の円滑な接続」について	参観した園と学校の取組や子供の表れを通して「多様性への配慮」や「すべての子供たちの円滑な接続」を視点に協議を行った。園で自主的に遊びに取り組んでいる姿から小学校での学びに繋げるための工夫や、外国籍の子供も取り残さない支援等を行う大切さを確認した。
6月24日 15時～ 16時30分	・ 令和6年度の取組について ・ 実践事例による検証について ・ 架け橋カリキュラムの成果と課題について（年度初めの1年生の様子から） ・ 検証のためのアンケート内容につ	実践事例による検証について6年度の方法と内容について共有した。1年生の様子から考えられる成果と課題については、学園代表の報告をもとに検討した。園と学校での遊びの捉え方

	いて	に違いが見られることから共通理解を図る必要性を確認した。アンケート内容についても検討し、意見を参考に対象者を見直し、実施することを決定した。
10月1日 15時～16時30分	- 実践事例の経過報告について - アンケート結果について - 架け橋プログラム事業の成果と課題について - 令和7年度以降の架け橋プログラム事業について	実践事例の経過やアンケート結果を共有し、2年半の取組の「成果と課題」「令和7年度以降の架け橋事業」について検討した。実践事例をもとにした検証やアンケートの結果から架け橋事業の成果が表れていることや、今後に向けて教職員の資質を向上させていくこと、事業の継続の必要性を確認した。
1月17日 15時～16時30分	- 実践事例の経過報告について - 架け橋プログラム事業の成果と課題について - 令和7年度以降の架け橋プログラム事業の取組について	実践事例の経過報告や3年間の取組の「成果と課題」について検討し、円滑な接続が進んだことを確認した。指定事業が終了となる令和7年度以降の架け橋事業については、学園を中心に取り組み、市としても幼小中一貫教育の仕組みを生かし、持続可能な取組にしていくことを確認した。

3-3. 成果と課題

＜架け橋期のカリキュラムに関する議論＞

本市においては、平成 29 年度にスタートした幼小中一貫教育プログラムに幼小接続カリキュラムが策定されていた。そこで、令和 4 年度の第 1 回カリキュラム開発会議において、幼保小架け橋プログラム事業のねらいや方法について共通理解を図り、既存の幼小接続カリキュラムを生かして架け橋期のカリキュラムを作成すること、具体的な内容はワーキンググループにおいて作成していくことを決定した。第 2 回の会議において、ワーキンググループで作成したカリキュラムのモデル案について提示したが、前提となる「袋井市として育ってほしい子どもの姿」を示す必要性が語られたことから、ワーキンググループで、市としての取組の重点や「育ってほしい子どもの姿」を記した案と学園ごとのカリキュラム案を作成し、第 3 回から第 4 回の会議において内容を検討した。市の架け橋期の重点は「試したり、考えたり、伝え合ったりする」とし、カリキュラムについては、学園ごとの特色を出すことや、内容の精選を進めたいという意見を受けて、修正案に基づき協力園・協力校を中心に実施していくことを決定した。

令和 5 年度の第 1 回会議では、年度当初の 1 年生の様子について検討を行い、「スタートカリキュラムの実施により安心感が得られた」といった意見が園の代表や保護者代表の委員から出され、取組の進捗の様子を確認した。カリキュラムは、実施しながら検証、改善も進めていくことも確認した。カリキュラムの改善については、幼児期・小学校に共通する資質・能力の 3 本柱に合わせていくことと、私立園の委員から「様々な学園に卒園児を入学させる園でも使いやすいものがほしい」という意見に対応した市の統合版を作成していく方向性を確認した。第 2 回から第 5 回の会議においては、ワーキンググループで進めた「ステージにおいて育ってほしい子どもの姿」や学園カリキュラムの修正案、市の統合版（袋井市版）の内容について検討を重ねた。袋井市版と学園版の位置付けについては、袋井市版を学園版の上位に位置付け、シンプルな内容にすることにした。また、令和 6 年度は、修正したカリキュラムに基づく保育・教育を、全園・全小学校において実施することを確認した。そして、エピソード記録については、検証を深めるために形式を工夫することを確認した。

令和 6 年度の第 1 回会議は、園・学校を会場とし、委員が園・学校の取組と子供の様子を参観して、本市がねらう「多様性への配慮」や「すべての子供たちの円滑な接続」を視点を協議を行った。また、市が作成したカリキュラム内容が実践されているか、小学校における年度当初の接続を意識した教育課程が実施され、課題がないか参観した。その結果、カリキュラムを生かして園で自主的に遊びに取り組んでいる姿から小学校での学びに繋げるための工夫や、外国籍の子供も取り残さない支援等を行うことの大切さを確認した。第 2 回の会議では、1 年生の様子から考えられる成果と課題について検討し、園と学校での「遊び」の捉え方に違いが見られることから共通理解を図る必要性を確認した。第 3 回と第 4 回の会議では、実践事例の経過報告やアンケート結果を共有し、3 年間の「成果と課題」「令和 7 年度以降の架け橋事業」について検討した。円滑な接続が進み、架け橋事業の成果が表れていることや、今後に向けて教職員の資質の向上に取り組むこと、指定事業終了後も事業の継続を求める意見が出された。令和 7 年度からは、学園を中心に取り組み、市としても幼小中一貫教育の仕組みを生かして、持続可能な取組を継続していくことを確認した。

袋井市の重点と育ってほしい子どもの姿

袋井市の重点と育ってほしい子どもの姿

「袋井市幼保小の架け橋期のレインボープロジェクト」

袋井市では「自立力」と「社会力」を備え「夢を抱き、たくましく次の一步を踏み出す15歳」を幼小中一貫教育をとおして育成しています。

その中で、学びに向かう意欲の向上、学力の向上、早い段階でのつまずきの解消のために、就学前教育・幼小接続プログラムを作成し、「経験を通して発見したり考えたりできる」ことを重点として、幼児期からの円滑な接続に努めてきました。

新たに、レインボープロジェクトを進めるにあたり、5歳児から小学校1年生にかけての架け橋期は、これまで以上に一人ひとりの子どもの個性や意欲を尊重し、子どもの思考を促すことや、多様な考えに触れ、豊かな経験を積ませることが大切です。

そこで、架け橋期の重点を「試したり、考えたり、伝え合ったりする」とし、公立・私立、幼保こども園・学校の種別を問わず、子どもに関わる大人が連携・協働しながら思考力・判断力・表現力等を育みます。

架け橋期の重点

試したり、考えたり、伝え合ったりする

		5歳児（年長）				小学校1年生			
		4月～5月	6月～8月	9月～12月	1月～3月	4月～5月	6月～8月	9月～12月	1月～3月
ステージ		I	II	III	IV	V	VI	Ⅶ	Ⅷ
自立力	生活	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	気持ちよく生活するために必要なことに気付く。自分で取り組む	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する
	学習	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する
社会力	生活	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する
	学習	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する	年齢になった喜びと意欲をもって生活する

学びの芽生え

知識・技能の基礎
思考力・判断力・表現力等の基礎
学びに向かう力・人間性等

遊びを通しての総合的な指導
【5領域】健康・人間関係・環境・言葉・表現

【遊びのプロセス】
遊びの創出→遊びへの没入→遊びの繰り返し→遊びの振り返り

給児期の終わりまでに育ってほしい姿

- ・保護者や仲間と協力し、意欲をもって生活する
- ・自立心・協同性・進取心・規範意識の芽生え
- ・社会生活との関わり
- ・思考力の芽生え
- ・自然との関わり・生命尊重
- ・数量や図形・図表や文字などへの関心・感覚
- ・言葉による伝え合い
- ・豊かな感性と表現

学びに向かう力・人間性等

知識・技能
思考力・判断力・表現力等

生活科を中心とした総合的・関連的な指導
国語・算数・生活・体育・音楽
園工・道徳・特別活動

【学びのプロセス】
課題の発見→自分で考える→友達との交流→振り返り（納得解）

<会議設置による成果と課題>

カリキュラムの開発に当たっては、文部科学省のねらいや架け橋期の保育・教育の在り方に関して、大学教授の委員から専門的な立場から積極的に意見をいただいたことで、市としての方針を固めていくことができた。具体的なカリキュラムの作成や実施状況、子供の表れ等については、協力園・協力校の様々な立場の委員から意見をいただくことで、現場を踏まえた進捗状況を掴むことができた。また、保護者代表の委員からは、自身の子供の様子や他の保護者の思い等を積極的に発言いただくことで、架け橋期の取組の成果や課題を確認することができた。さらに、地域の有識者からは、園や学校での経験を踏まえて、カリキュラムに表れない教員・保育者の資質の向上に関する意見をいただくことができた。

協力園・協力校以外の委員から、園・校での子供の様子を参観したいという意見が出されたため、交流活動等の機会を紹介したが、都合がつかないことが多かった。そこで、令和6年度の第1回カリキュラム開発会議は、園・小学校を会場として、学びや生活の様子の参観を通して議論することにより、架け橋期の取組の成果や課題を探ることができた。

4. 架け橋期のカリキュラム

4-1. 開発プロセス

令和4年度の第1回カリキュラム開発会議において決定した方針に基づき、事務局は文部科学省が示したカリキュラムのイメージを参考にして、「育ってほしい子どもの姿」「経験させたい内容」「指導上の配慮事項」「家庭との連携」を幼小の共通の項目として設定し、既存の幼小接続カリキュラムに記載されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい子どもの姿」を手掛かりにモデル案を作成した。

このモデル案について、ワーキンググループ会議（協力園・協力校の教員・保育者で構成）で内容の検討や修正を重ね、学園ごとの特色も加えてカリキュラムを作成した。また、1年生4月の週案については協力校で作成した。学園カリキュラムや週案については、全園・全校の代表が集う就学前教育推進会議において、協力園・協力校の委員から説明を行い、令和5年度からの実施を呼びかけた。

令和5年度は、協力園・協力校を中心に市内全域で学園のカリキュラムに基づく保育・教育を実施した。取組の状況については、就学前教育推進会議において学園や小学校区のグループワークの中で協議し、教育内容・指導方法等の相互理解を深めたり、成果や課題をカリキュラムの改善につなげたりした。また、私立園からの「様々な学園に卒園児を入学させる園でも使いやすいものがほしい」という要望に対応し、ワーキンググループでは袋井市版の作成も行った。さらに、開発会議の意見を受けて、袋井市版・学園版ともに、「育ってほしい子どもの姿」と「経験させたい内容」を幼児期・小学校に共通する資質・能力の3本柱に合わせて改善した。

令和6年度は、修正したカリキュラムに基づく保育・教育を、市内全園・全小学校において実施した。また、協力園・協力校を中心に実施した複数の事例によるカリキュラムの検証、就学前教育推進会議での協議等で、3年間の成果や課題を明らかにして、令和7年度版のカリキュラムの作成につなげた。

4-3. 架け橋期のカリキュラムの実践

カリキュラムの実践

架け橋期のカリキュラムに基づく保育・教育は、令和6年度には、全園・全小学校において実施した。カリキュラムに示された資質・能力を確認して、具体的な活動や学習の指導計画を立て、育みたい力の育成につなげた。

カリキュラムに示された資質・能力を育む保育・教育（5歳児）

知識及び技能の基礎	- 積極的に身体を動かし、様々な活動に取り組む。(健康・自立) - きまりの必要性が分かり、守ったり考え合ったりする。(自立・道徳・社会) - 絵本や物語に親しみ、言葉のもつ意味やおもしろさなどに気付く。(言葉)	- 時間や活動を意識しながら見通しをもって生活を進める。(健康・自立・道徳・社会) - 自分のよさに気付き、自信をもって行動する。(自立)		【知識及び技能の基礎】 2歳児と一緒にかくれんぼをする。年長者としての自覚をもち、2歳児に優しく接することができる自分のよさに気付いていく。
思考力・判断力・表現力等の基礎	- 共通の目的に向かって考え、工夫したり協力したりする。(協同・思考・言葉) - 自分の体験や友達の考えを生かして、自分の考えを広げて楽しむ。(思考・言葉) - 自分の思いや考えを相手に分かるように言葉で伝えたり、相手の話を理解して行動したりする。(言葉・表現・思考・自立) - 友達と相談しながら工夫合って表現する過程を楽しむ。(表現・言葉・協同・思考)			【思考力・判断力・表現力等の基礎】 連想カードゲームを通して絵を見てよりよいヒントになるよう工夫したり、ヒントを基に連想の幅を広げたりできるようにしていく。
学びに向かう力・人間性等	- 様々なことに繰り返し取り組み、諦めずにやり遂げる達成感を味わう。(自立) - いろいろな人と触れ合い関わる中で、地域の人に親しみをもつ。(社会) - 身近な自然に触れ、不思議に感じたことを試したり調べたりして関心を高める。(自然・思考・表現)	- 互いの思いや考えを認め合い、友達と遊びを進めることを楽しむ。(協同・言葉・社会) - 自分の気持ちに折り合いをつけながら生活しようとする。(道徳) - 場や状況を考え行動しようとする。(社会・道徳) - 身近にある文字や数などに興味・関心をもち、生活に取り入れようとする。(数量)		【学びに向かう力・人間性等】 園の裏で捕まえたカナヘビが餌を食べる様子に目を輝かせている。どんな飼育方法がよいか考える活動につながっていく。

カリキュラムに示された資質・能力を育む保育・教育（1年生）

知識及び技能	- 小学校の生活の流れを知り、安全に過ごす。(健康・自立) - 楽しく生活するために大切なルールを理解する。(自立・道徳・社会) - 身の回りの整頓や活動の準備・片付けなどに自分から取り組む。(自立) - ひらがなや10までの数を理解し、読んだり書いたり、数えたりする。(数量)	- 生活のリズムを身に付け、ルールやマナーを守って健康で安全に過ごす。(健康・自立・道徳・社会) - 係や当番活動などの学級の仕事を進んで行う。(自立・協同) - 植物の栽培を通して、生命をもっていることや成長に気付く。(自然)		【知識及び技能】 やりたい遊びは、子どもたちが話し合って決定する。遊びながら新しいルールを自分たちで作り、よりよい遊び方をしていく。
思考力・判断力・表現力等	- 新しい学習に興味や関心をもち、進んで考える。(思考・数量) - 分かったことや見つけたこと、感じたことを友達に伝える。(思考・言葉・表現)	- 自分の思いや考えを、理由を添えて友達と伝え合う。(思考・言葉・表現) - 具体物を使って数量を比べたり、簡単なたし算・ひき算をしたりする。(思考・数量) - 見たことややしたこと、感じたことを造形等で表現し、伝え合う。(思考・表現)		【思考力・判断力・表現力等】 教科書の絵を見ながら園で遊んだことを思い出させた後、どんな絵を描きたいか友達と伝え合い、思いを豊かに絵で表現することにつながる。
学びに向かう力・人間性等	- 新たな友達と進んで触れ合い、一緒に活動する楽しさを味わう。(自立・協同・社会) - 友達や先生に挨拶したり、親しみをもって関わろうとする。(自立・協同・社会)	- 自分のめあてを考え、達成に向けて努力しようとする。(自立) - 音楽や図工などの表現をとおして、自分の思いを表現する喜びを味わう。(表現)		【学びに向かう力・人間性等】 日課の工夫により遊ぶ時間を設定する。好きな遊びを思い切り楽しむ中で、新しい友達との人間関係をつくっていく。

実践事例による検証

本市の架け橋期の取組は、「一人一人の多様性に配慮しながら、すべての子供たちの円滑な接続をめざす」ことから、検証については、「公立園から入学」「私立園からの入学」「外国籍の子」「支援を要する子（通常学級）」「支援を要する子（支援学級）」などのケースで5歳児の4月から1年生の3月までの2年間の取組と成長の様子を把握し、成果と課題を探った。

実践事例3 私立園から1人入学

R 5 4月の様子

・裏表のない性格で生活を明るく楽しむ事ができる。・気づいたことや考えを自分なりに言葉にして伝えられるが、人の話を最後まで聞いて受け入れることが苦手。

実践の概要

	【知識及び技能の基礎】『みんなのおもちゃを大切に』 ※きまりの必要性が分かり、守ったり考え合ったりする。 6月 ・ビー玉転がしに使うビー玉が、片づけるたびに少なくなることから、話し合いをしたところ、率先して意見を出すのが、人の意見は受け入れられず「でもさ、だってさ」がよく聞こえた。しかしいろいろな方法を試していくと、自分の考え以外にもよい方法があることを知る経験となった。
	【思考力・判断力・表現力等の基礎】『バスケットボールで遊びたい』 ※共通の目的に向かって考え、工夫したり協力したりする。 9月 ・ワールドカップで見たバスケットボールに興味を持ち、ゴール作りを始めた友だちに協力し、できあがったもので遊ぶ楽しさを味わった。よそのクラスの友だちにも楽しさを味わってもらいたいと、看板作りをするアイデアを考え、応援をしたり呼び込みをしたり、活動の幅を広げて楽しんだ。
	【学びに向かう力・人間性等】『おばけのえんそく』 ※様々なことに繰り返し取り組み、諦めずにやり遂げる達成感を味わう。 10月 ・取り掛かりは自己主張ばかりで、人の意見を制してまで意見を通すことがあった。時間をかけて、じっくり毎日の振り返りを重ねながら遊ぶよう心掛けたことで、自分と友達の違いをまとめると皆が納得することを肌で感じ、人の話に耳を傾ける大切さを学んだ。

R 6 3月の様子（年度当初からの変容）

・場の雰囲気を感じ、人の思いに耳を傾けられるようになった。友だちとの話し合いの場では進んで中心になり意見をまとめられた。面白いことを考えては周りを巻き込んで楽しめる。

小学校への引き継ぎ事項

・様々な興味や向き、人を喜ばせたい思いが強い。誰にでも何にでも関心を持ちすぎで一つ一つは雑になりがち。張り切って空回りして早合点をしてしまうため、落ち着かせる時間が必要。

【実践事例】

園からの引き継ぎ事項を受けての小学校の方針

・話を最後まで聞き、落ち着いて学習や生活に取り組む。

・友達と話しながら、自分の考えを伝えたり友達の考えを聞いたりして、よりよい考えをつくる。

R 6 4月の様子

・健康観察時に「元気モリモリクッパちゃん！」とポーズをつけて答え、周りの友達を楽しませたことが周りの友達の共感を得て、他の友達に広がった。面白いことや楽しませることを考えて、周りを巻き込んで活動することができた。

実践の概要

	【知識及び技能】活動名『なつがやってきた』6月 育みたい資質・能力（ルールやマナーを守って健康で安全に過ごす。） ・夏の自然探しや遊具遊びなど自由度の高い活動において、約束よりも自分の楽しさを優先し、自分ルールで遊ぶ姿が多く見られた。生活科「なつがやってきた」の水遊びの時間では、安全に楽しく遊ぶ約束をみんなで考え、授業の始めに約束を確認した。さらに、見える形にしたことで、決められた場所でお水を入れたり、的に向かって水を掛けたりするなど、約束を守って楽しく活動することができた。
	【思考力・判断力・表現力等】『あきをたのしもう』11月 育みたい資質・能力（伝えたい目的や相手の状況に応じて伝え方を選ぶ） ・普段の授業や生活では、自分が伝えたい思いを強く主張する姿が多く見られた。生活科『あきとなかよし』では、秋のおもちゃ祭りとしてお店屋さんを聞き、園児を招待した。年下の園児に自分たちで考えたおもちゃで楽しんでもらうために、やり方を見せながら遊び方を伝える姿が見られた。
	【学びに向かう力・人間性等】活動名『かたちあそび』10月 育みたい資質・能力（学習活動のめあてや目的について、友だち協力しながら活動しようとする。） ・グループ活動の際に、自分の思い通りにしようとする姿が多く見られていた。算数『かたちあそび』の活動では、使うものはグループで持ち寄った箱、ねらいはどうしたら箱を高く積み上げられるかとし、友達と協力することが欠かせない状況とした。他のグループの様子を共有したり、物差しで高さを測ったりしながら活動することで、グループの友達と協力しながら活動することができた。

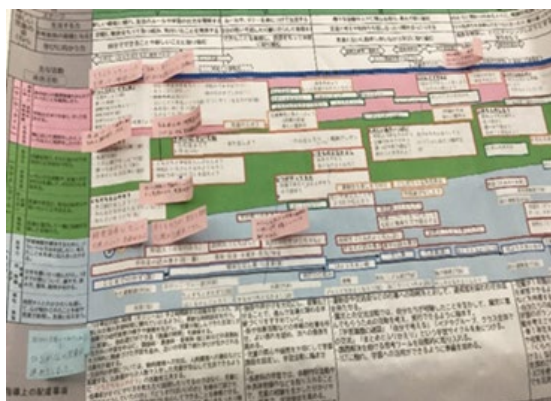
成果と課題（R 6年度末における年度当初からの資質・能力面での変容）

・学校生活や学習することに慣れ、落ち着いて学習や生活に取り組む姿が増えてきた。

・話し合う中で、友達の考えを聞き入れながら、協力して活動することができるようになってきた。

改善

カリキュラムは、協力園・協力校における「カリキュラム実施後の気付き」に基づく就学前教育推進会議での協議や、開発会議での意見等を生かして、学園版カリキュラムの「育みたい資質・能力」や「経験させたい内容」等を修正した。また、実践事例での成果や課題を生かして、全ての子供たちの円滑な接続を図るために、多様性（特別支援・外国籍の子ども）へ配慮する内容も追記した。



【実施後の気付きを入れたカリキュラム】



【ワーキンググループでの改善作業】

5. 自治体の支援

5-1. 研修の実施

<実施した研修の概要>

令和4年度				
実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
4月12日	第1回就学前教育推進会議	対面	5歳児担任 1年生担任	・ 架け橋事業の概要理解 ・ アプローチカリキュラム、スタートカリキュラムの様子についてのグループ協議
8月5日	第2回就学前教育推進会議	対面	5歳児担任 1年生担任	・ アプローチカリキュラム、スタートカリキュラムの現状と改善案についてグループ協議
1月26日	第3回就学前教育推進会議	対面	教育課程・ 保育計画担当者	・ 架け橋事業の取組経過と次年度の取組理解 ・ 架け橋期の取組の成果と課題についてグループ協議 ・ 交流・体験事業、合同会議等行事予定について

令和5年度				
実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
4月11日	第1回就学前教育推進会議	対面	5歳児担任 1年生担任	・ 架け橋事業の取組理解 ・ 自園・自校の架け橋期の取組の紹介（グループ協議）
8月4日	第2回就学前教育推進会議	対面	5歳児担任 1年生担任	・ 架け橋期の取組と保幼小連絡会における成果と課題の理解 ・ 架け橋期の取組の振り返りと改善案についてグループ協議
11月16日	第3回就学前教育推進会議	対面	希望者	・ 文科省架け橋特別委員会委員長無藤隆氏の講演「幼児教育と小学校教育をつなぐ架け橋プログラムとは」
1月25日	第4回就学前教育推進会議	対面	教育課程・ 保育計画担当者	・ 架け橋事業の取組経過と次年度の取組理解 ・ 架け橋期の取組の成果と

				課題、学園カリキュラムの活用についてグループ協議 ・交流・体験事業、合同会議等行事予定について
令和6年度				
実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
4月11日	第1回就学前教育推進会議	対面	5歳児担任 1年生担任	・架け橋事業の本年度の取組理解 ・「カリキュラムの活用状況」「支援・配慮を要する子への対応」「園・小で共有したい活動」「交流活動充実のための方策」「保育・授業の参観・研究」についてグループ協議
8月5日	第2回就学前教育推進会議	対面	5歳児担任 1年生担任	・スタートカリキュラムや保幼小連絡会における成果と課題についての理解 ・「今後のアプローチカリキュラムにおいて進めていきたいこと」「次年度のスタートカリキュラムにおける遊びの取り入れ方」「秋の自然物を使った活動をどのように進めるか」についてグループ協議
11月21日	第3回就学前教育推進会議	対面	希望者	・静岡大学教育学部田宮縁教授の講演「子供の発達段階を見通した架け橋期の教育の充実」
1月23日	第4回就学前教育推進会議	対面	教育課程・ 保育計画担当者	・3年間の架け橋事業の取組経過と、調査研究事業終了後の取組についての理解 ・本年度の架け橋期の取組の成果と課題、次年度からの継続・充実のための取組、主要行事の日程・内容について協議

＜研修の成果と課題＞

本市の就学前教育推進会議は、架け橋事業に取り組む以前から実施している。公立私立を問わず、全ての園・小学校から教員・保育者が参加し、架け橋期の保育・教育の取組についての理解を深めたり、学園や小学校区ごとのグループワークでカリキュラムや連携・交流活動について協議したりしている。

令和6年度第1回会議後の参加者による自己評価では、「架け橋事業のねらいや内容についての理解」「カリキュラムがねらう資質・能力を育成する保育・教育を進める意欲の高まり」「支援・配慮を要する子の円滑な接続についての意識の高まり」「互いの学習・活動内容についての理解を深め、今後の活動に生かす意欲」のいずれの項目に関しても、90%以上が肯定的な回答をした。また、園の参加者からは、「互いが顔を合わせて話すことで、より具体的な手立てや姿が分かりとても良い機会になった。」「同じ目標があることで、育てたい子供の姿、考えを共有でき、一緒に頑張る意欲につながった。」といった感想があった。小学校教員からも「これまでの学園研修で園小のつながりについて学んできたがざっくりとしたものだった。今回の研修で園の先生との協議を通して、指導の見通しがついた。園の指導を生かしていきたい。」という声があった。

第3回会議の講演後にも、「幼児の遊びの様子から学びへの捉え方がとても分かりやすく、小学校の先生方への伝え方の参考になった。また10の姿と5領域の関係性や指導要領の読み取り方のポイントなども勉強になった。」「数や文字の環境構成について、遊びの中から習熟できたらと願っているが、子供の興味の有無の偏りがあるため、個々の姿を丁寧にとらえることから始めたいと感じた。」「幼児教育についての理解が深まった。幼稚園での育ちを、どう小学校につなげていくか、その方法についても学んでいきたい。」といった感想が聞かれた。

年間に複数回、園と小学校の担当者が顔を合わせながら研修することで、研修する内容を学ぶだけでなく、互いの距離感を縮め活動内容の連携や交流活動の充実につなげることができている。



【学園ごとのグループワーク】



【講演を通して架け橋期について学ぶ】

5-2. 教材等の作成

＜作成した教材等の概要＞

カリキュラムの取組を広めるパンフレット

幼小中一貫教育を推進する中で「架け橋期のカリキュラム」を実施していくことを周知するためのパンフレットを作製した。パンフレットは、園を通じて3歳児から5歳児の保護者に、小学校を通じて1年生の保護者に、そして全園・全校の教員・保育者に配布した。

令和6年度の年度初めの学園研修会においては、このパンフレットを用いて幼小中一貫教育における架け橋期の位置付けやカリキュラムの活用の仕方について説明し、中学校教員も含めた全教職員・保育者の理解を深めた。

5歳児の教育・保育では

～小学校につながる学びや生活の基盤づくりをします～

小中学校での学習を見据え「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力・人間性等」の3つの資質・能力を意識した指導を行っていきます。特に「学びに向かう力・人間性等」はテストで測ることのできる読み、書き、計算などとは異なり、**非認知能力**とも呼ばれ、生涯を通じて必要となる「自立力」と「社会力」の基盤となります。

資質・能力	育成の目標
好奇心	●わからないことを大人に聞く。 ●不思議に感じたことを考えたり試したりする。
協同性	●みんなと仲良く、力を合わせて活動する。 ●自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりする。
考えを伝える力	●自分がしたいことやしてほしいことを大人や友達に伝える。
がんばる力	●物事をあきらめずに、最後まで取り組む。

小学校1年生の教育では

～小学校での学びや生活の円滑なスタートをめざします～

すべての小中学校が、円滑な学校生活に向けて「架け橋期のカリキュラム」を実施しています。A小学校では、下図のように「なかよしタイム」を設定し、遊びながら友達関係を築くことで、豊から少人数で入学した児童も、集団生活に馴染めるように配慮しています。また、時間にとられない弾力的な日課を実施したり、教科にとられない総合的・関連的指導を実施したりして、無理なく小学校生活がスタートできるようにします。

時間	1校時	2校時	3校時	4校時	5校時
1校時	なかよしタイム （自由活動） ・自由な遊び ・自由な活動	なかよしタイム （自由活動） ・自由な遊び ・自由な活動	なかよしタイム （自由活動） ・自由な遊び ・自由な活動	なかよしタイム （自由活動） ・自由な遊び ・自由な活動	なかよしタイム （自由活動） ・自由な遊び ・自由な活動
2校時	授業時間 （教科・学芸）	授業時間 （教科・学芸）	授業時間 （教科・学芸）	授業時間 （教科・学芸）	授業時間 （教科・学芸）
3校時	授業時間 （教科・学芸）	授業時間 （教科・学芸）	授業時間 （教科・学芸）	授業時間 （教科・学芸）	授業時間 （教科・学芸）
4校時	授業時間 （教科・学芸）	授業時間 （教科・学芸）	授業時間 （教科・学芸）	授業時間 （教科・学芸）	授業時間 （教科・学芸）
5校時	授業時間 （教科・学芸）	授業時間 （教科・学芸）	授業時間 （教科・学芸）	授業時間 （教科・学芸）	授業時間 （教科・学芸）

◆お問い合わせ先
袋井市教育委員会教育企画課 未来の教育推進室 Tel. 0538-86-3221

保存版

3歳から15歳までの
育ちと学びをつなぐ



袋井市 幼小中一貫教育

幼小の円滑な連携・接続のために、市内全ての園・小学校で
「架け橋期のカリキュラム」を実践していきます

幼小中一貫教育をめざすもの

架け橋期のカリキュラムとは

今の子どもたちが社会人になる頃、日本や世界ではどのような時代を迎えているのでしょうか。しかし、どんなに時代が変わろうと、子どもたちには変化を乗り越え、たくましく生きてほしいと願っています。そのため袋井市では、幼小中一貫教育を通じて自分で行動する力とまわりの人と協働する力（自立力と社会力）をバランスよく身に付けさせたいと考え、幼小中を貫いた市独自のカリキュラムを開発・実践しています。

袋井市が定める幼小中一貫教育は、人格形成の時期である幼児教育を充実させることに最も重きを置き、それを学校教育に円滑につなげることを目指します。特に、5歳児と小学1年生の2年間を「架け橋期」と呼び、幼児教育と学校教育のつながりを重視した教育を進めます。子どもたちの学びや生活の基盤を育み、さらに学びの意欲向上やつまづきの解消につなげるためのカリキュラムを新たに作り、それに基づいた実践を進めます。こうした取組は市内全ての幼稚園・保育所・認定こども園と小学校が連携・協力して行います。

※幼小中一貫教育
この表記のうち、「協」とは、幼稚園・保育所・認定こども園における幼児教育全般を指します。

子供たちの力を効果的に引き出す

小中学校の9年間に3歳児から5歳児までの幼児教育を加えた12年間を通して、一貫教育カリキュラムに基づいた教育を行うことで、系統的かつ効果的に子供たちの力を育成します。

とまどいの原因
①生活習慣の変化
②対人スキルの未発達など

小1ギャップ
①学習方法の違い
②学習意欲の違い
③生活習慣の未発達など

より高く
登れる

幼小中一貫教育プログラム

3歳 4歳 5歳 1年 2年 3年 4年 5年 6年 1年 2年 3年

幼児教育 小学校 中学校

袋井市が環境、力を
入れているのはここ

①就学前教育カリキュラム
②架け橋期のカリキュラム
③教科カリキュラム
（国語、算数・数学、理科、社会、体育など）
④教科外カリキュラム
（キャリア教育、生活指導、学習指導など）

令和6年度

袋井市教育委員会

知識及び技能の基礎	思考力・判断力・表現力等の基礎	学びに向かう力・人間性等
・「共通の目的に向かって考え、工夫したり協力したりする。」（協同・思考・言葉） ・「自分の体験や友達の考えを生かして、自分の考えを広げて楽しむ。」（思考・言葉） ・「自分の思いや考えを相手に分かるように言葉で伝えたり、相手の話を理解して行動したりする。」（言葉・表現・思考・自立） ・「友達と相談しながら工夫し合って表現する過程を楽しむ。」（表現・言葉・協同・思考）	・「様々なことに繰り返し取り組み、諦めずにやり続ける達成感味わう。」（自立） ・「いろいろな人と触れ合い関わる中で、地域の人に親しみをもつ。」（社会） ・「身近な自然に触れ、不思議に感じたことを試したり調べたりして関心を高める。」（思考・思考・表現）	・「互いの思いや考えを認め合い、友達と遊びを進めることを楽しむ。」（協同・言葉・社会） ・「自分の気持ちに折り合いをつけながら生活しようとする。」（道徳） ・「場や状況を考えようとする。」（社会・道徳） ・「身近にある文字や数などに興味・関心をもち、生活に取り入れようとする。」（数量）
・「楽しく生活するために大切なルールを理解する。」（自立・道徳・社会） ・「身の回りの整頓や活動の準備・片付けなどに自分から取り組む。」（自立） ・「ひとがなや10までの数を理解し、読んだり書いたり、数えたりする。」（数量） ・「新しい学習に興味や関心をもち、進んで考える。」（思考・数量） ・「分かったことや見つけたこと、感じたことを友達に伝える。」（思考・言葉・表現） ・「新たな友達と進んで触れ合い、一緒に活動する楽しさを味わう。」（自立・協同・社会） ・「友達や先生に挨拶したり、親しみをもって関わろうとする。」（自立・協同・社会）	・「体や言葉活動などの学級の仕事を進んで行う。」（自立・協同） ・「植物の栽培を通して、生命をもっていることや成長に気付く。」（自然） ・「自分の思いや考えを、理由を添えて友達と伝え合う。」（思考・言葉・表現） ・「具体物を使って数量を比べたり、簡単なたし算・ひき算をしたりする。」（思考・数量） ・「見たことやしたこと、感じたことを造形等で表現し、伝え合う。」（思考・表現） ・「自分のめあてを考え、達成に向けて努力しようとする。」（自立） ・「音楽や図工などの表現を通して、自分の思いを表現する喜びを味わう。」（表現）	



【学びに向かう力・人間性等】
園の裏で捕まえたカナヘビが餌を食べる様子に目を輝かせている。どんな飼育方法がよいかわかる活動につながっていく。



【思考力・判断力・表現力等の基礎】
連想カードゲームを通して絵を見てよりよいヒントになるよう工夫したり、ヒントを基に連想の幅を広げたりできるようにしていく。



【知識及び技能の基礎】
2歳児と一緒にかくれんぼをする。年長者としての自覚をもち、2歳児に優しく接することができる自分のよさに気付いていく。



【学びに向かう力・人間性等】
日課の工夫により遊ぶ時間を設定する。好きな遊びを思い切り楽しむ中で、新しい友達との人間関係を築いていく。



【思考力・判断力・表現力等】
教科書の絵を見ながら園で遊んだことを思い出させた後、どんな絵を描きたいか友達と伝え合い、思いを豊かに絵で表現することにつなげる。



【知識及び技能】
やりの遊びは、子どもたちが話し合って決定する。遊びながら新しいルールを自分たちで作り、よりよい遊び方をしていく。

入学説明会で配布したパンフレット

小学校の入学説明会は、保護者が小学校の教育を知るとともに、子供の入学に対する心構えをもつ大事な機会である。この機会に各小学校におけるスタートカリキュラムの取組について説明するパンフレットを作成した。

各学園（小学校）では、パンフレットの内容だけでなく、具体的な1年生の活動の様子について写真等を用いて説明することで、保護者の不安の軽減を図った。

新1年生の保護者の皆様へ

みんな安心 ○○学園（小学校）スタートカリキュラム

お子様のご入学、おめでとうございます。
 どのお子さんも、小学校生活への期待とともに、不安もかかえていることでしょう。「お友達はあるかな?」「勉強はできるかな?」という思いは、保護者の皆様も同じかもしれません。
 そんな不安や心配を少しでも軽くして、新1年生が学校生活を楽しいと感じながら、自己を発揮できることを願って、「○○学園（小学校）スタートカリキュラム」に取り組みます。

スタートカリキュラムとは?

スタートカリキュラムは、幼稚園や保育所、こども園の遊びや生活を通した学びと育ちを基礎として、自分らしさを発揮し、新しい学校生活に踏み出していけるように工夫されたカリキュラムです。

工夫1 裁量の時間を設けます。

新生活のスタートである4月は、各園で児童が親しんできた生活リズムに配慮し、自由遊びができる時間を、確保します。

工夫2 ゆるやかな活動時間からスタートします。

45分を基本とするのではなく、集中が持続できる時間や意欲の高まりを大切にするとともに、活動に応じて15分の短い時間や2時間続きの長い時間を設けます。

工夫3 3つの学びの時間を設けます。

小学校生活に少しずつ慣れて学習に取り組めるように、各教科の枠組みにとらわれず、「せいかつタイム」「なかよしタイム」「まなびタイム」の3つの学びの時間を設けます。

工夫4 安心できる体制を整えます。

担任だけでなく、他の学校職員や上級生との関わり場を設けることで安心感をもたせます。大勢の人に温かく迎えらる経験を通じて、「学校には優しい人がいっぱいいる」「明日も学校に行きたいな」という思いを育んでいきます。

○○小学校スタートカリキュラム 進案 【第1週】

日	4/〇（月）	4/〇（火）	4/〇（水）	4/〇（木）	4/〇（金）
週のめあて	自分のことは自分でやり、学校での過ごし方を知ろう				
朝活動	朝の支度をしよう （ランドセル・文房具のしめまい、提出物の出し方）	トイレの使い方を覚えよう （トイレや手洗い場の使い方）	困ったときの伝え方を覚えよう （保健室の出入りの仕方、保健室でのあいさつ）	困ったときの伝え方を覚えよう （職員室の出入りの仕方、職員室でのあいさつ）	整頓の仕方、運動場への避難の仕方
1校時	好きな遊びをしよう	好きな遊びをしよう	好きな遊びをしよう	好きな遊びをしよう	好きな遊びをしよう
休み時間	休み時間	休み時間	休み時間	休み時間	休み時間
2校時	自己紹介の仕方を考えよう 自己紹介をしよう	友達を増やそう （隣のクラスの友達に自己紹介をしよう）	仲間集め遊びをしよう	生 園でした遊びを思い出そう	生 園でした遊びを思い出そう
休み時間	休み時間	休み時間	休み時間	生 運動場でクラスの友達と一緒に遊ぼう	生 2年生と一緒に遊ぼう
3校時	国 あいさつしよう	国 はつきり話そう	国 はつきり話そう	国 いろいろな線を書こう	国 いろいろな線を書こう
国 リズム遊び、読み聞かせ	国 リズム遊び、読み聞かせ	国 リズム遊び、読み聞かせ	国 リズム遊び、読み聞かせ	国 リズム遊び、読み聞かせ	国 リズム遊び、読み聞かせ
休み時間	休み時間	休み時間	休み時間	休み時間	休み時間
4校時	学 給食の準備をしよう	学 給食の準備をしよう	学 給食の準備をしよう	学 給食の準備をしよう	学 給食の準備をしよう
給食	マナーを守って、給食を食べよう				
昼休み 屋活動	給食の片付けをしよう				
	帰りの支度をしよう				
	車につけて下校しよう				

<教材等の成果と課題>

令和6年度に実施したアンケートでは、「小学校入学に向けて園と小学校が連携して取り組んでいることを知っていますか」の設問に対して、5歳児の保護者の83%、1年生保護者の92%が肯定的な回答をしている。また、「小学校での時間割の工夫や遊びを通しての仲間づくりなどが行われたことを知っていますか」の設問で1年生保護者の87%、「小学校での時間割の工夫や遊びを通しての仲間づくりなどの取組に満足していますか」の設問で1年生保護者の93%が肯定的な回答をしている。

架け橋カリキュラムや小学校のスタートカリキュラムの取組を紹介するパンフレットを配布し活用したことが、保護者の理解と取組への満足度の向上に役立った。

5-3. その他の支援

<その他の支援の概要>

園・小学校の訪問と研修の実施

架け橋期のコーディネーターが、日常的な園や小学校の訪問だけでなく、架け橋事業の理解と協力を得るために、令和4年度には協力園・協力校で、令和5年度には全園・全小学校を訪問して教員・保育者を対象に研修を実施した。

架け橋期の目的から、幼児教育と学校教育の比較、袋井市の取組などについてプレゼンテーション資料を用いて説明することで、理解の向上を図った。

研修後には、「担当者だけでなく、全ての教員が理解を深めて進めていくことが大切。」「園で育ててきた力を伸ばしてもらえるように、小学校との連携を深めたい。」「架け橋の取組で、園から一人のみの入学の子でも安心して学べる」といった意見をいただいた。



【園・小学校での研修】

架け橋通信の発行

円滑な接続や交流活動の様子などを掲載した通信「レインボープロジェクト」を発行し、園や小学校の保護者だけでなく、市議会議員や教育委員、コミュニティセンターなどに、メールや連絡システム、紙面等で情報発信した。

令和5年12月25日発行 袋井市教育委員会幼児教育センター No.19

袋井市幼保小架け橋期の レインボープロジェクト

交流を通して成長する
～秋のお店屋さんの活動～

松ぼっくりの釣りを楽しむ

どんぐり遊びに挑戦する

11月から12月にかけて、1年生が生活科の活動として、年長児を招待する交流活動が、多くの学校で行われました。

秋のお店屋さんの活動では、1年生が園での経験を生かして木の葉や葉っぱなどを利用して作ったおもちゃを、年長児が楽しむ姿が見られました。「いろいろな遊びができて楽しかった。」「おみやげももらえてうれしかった。」「男の子も女の子もいっぱい来てくれてうれしかった。」「どんぐり迷路はむずかしかったのに、ほとんどの人ができていいと思った。」「自分自身の満足感とともに年長児のがんばりを認める感想が聞かれました。交流活動は、年長児、小学生双方の成長につながる取組です。今後も、様々な交流が実施されます。

令和4年度より幼保小をつなぐ架け橋プログラム事業を進めています。
幼保小での連携の様子などを「幼保小架け橋のレインボープロジェクト」にて紹介しています。
袋井市教育委員会幼児教育センター 電話 86-5511

令和6年7月23日発行 袋井市教育委員会 未来の教育推進室 No.23

袋井市幼保小架け橋期の レインボープロジェクト

園での経験を生かして学ぶ！

【園での活動】
水遊び・シャボン玉遊び

【小学校生活科】
「なつがやってきた」水で遊ぶ

園では、この時期シャボン玉遊びや泥遊び・色水遊びなど、季節を感じながら自然や身近な物に対して興味や関心をもって、試行錯誤をしながら遊びを深めています。

小学校の生活科の「なつがやってきた」という単元は、こうした園において身近な環境に関わりながら遊びを深めた経験の延長線上にあります。水鉄砲やのび、遊びに使う物を工夫して作ったり、みんなで遊び方を工夫したりしています。シャボン玉も、園の時の経験を生かして吹き方や吹く量を調整しながら楽しんでいます。こうして、夏の自然との関わりを振り返り、気付いたこと・楽しかったことを友達と伝え合います。

小学校では、2学期も「いきものとなかよし」「たのしいあそびいっぱい」など、身近な生き物や自然と関わる活動が行われます。園では、引き続き身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりすることを大切にしていきます。

令和4年度より幼保小をつなぐ架け橋プログラム事業を進めています。
幼保小での連携の様子などを「幼保小架け橋のレインボープロジェクト」にて紹介しています。
袋井市教育委員会未来の教育推進室 電話 86-3221

【架け橋通信レインボープロジェクト】

6. 本事業に取り組んだことによる成果

6-1. 自治体における成果

<自治体における成果>

1 架け橋期のカリキュラムに基づく保育・教育の全園・全小学校での実施

令和4年度から作成を始めた架け橋期のカリキュラムを、令和5年度中に袋井市版と学園版として完成させ、令和6年度には、協力園・協力校だけでなく、全園・全小学校においてカリキュラムに基づく教育・保育が行うことができた。また、各園や学校では、具体的な活動内容を年間計画や指導計画、月案・週案に記して実践した。園においては、指標となるカリキュラムに示された資質・能力を育む取組をすることで、施設間の保育・教育の質の差を縮めることができた。小学校では、1年生のスタートの時期に、時間割の弾力的・合科的な運用や、裁量の時間数を活用した「遊びの時間」の設定など、従来にはなかった取組で、円滑な接続を行うことができた。特に小学校1年生における登校渋りや泣いている子供が減少したことは大きな成果である。

2 教職員の意識の向上

架け橋期のコーディネーターや幼児教育アドバイザーによる園・小学校への積極的な訪問、助言や事業理解のための研修の実施により、教職員の架け橋期の保育・教育への意識が高まった。また、園、小学校、中学校間で、異校種の保育・教育の参観や体験活動の機会を増やしたことで、互いの教育・保育の理解が深まった。さらに、各校の幼保小合同会議において、スタートカリキュラムの様子の参観をもとに協議をすることで、園での取組が小学校のスタートに密接につながっていることを認識し、その後の保育・教育の改善につなげることができた。さらに、統括校長会、架け橋担当校長会、各学園幼小中一貫研修会を通して架け橋期のカリキュラムについて協議できたことは大きな成果である。

3 支援を要する子供の円滑な接続

発達面や外国籍などの理由で支援を要する子供について、2年間の実践事例を通じて検証する中で、園が特性に配慮しながら支援をしてきた取組を、小学校が入学前に事前参観したり、情報を引き継いで適切な対応策を講じたりすることで、不適切な行動を減らし、円滑な接続ができることを確認できた。

4 保護者の事業理解の深まり

架け橋通信を保護者へ発信したり、架け橋期のカリキュラムの取組を広めるパンフレットを配布したり、各小学校の入学説明会でスタートカリキュラムについて説明したりすることで、保護者の架け橋事業に対する理解が深まり、子供の入学に対する不安の軽減につなげることができた。これは、保護者へのアンケート調査を実施したことからも、年々理解が深まったことがうかがえた。

<定量的・定性的な調査結果>

幼保小架け橋事業アンケート結果 令和6年7月実施

対象 幼児教育施設教職員（291人/386人）回答率75%

小学校教員（244人/277人）回答率88%

5歳児保護者（457人/623人）回答率73%

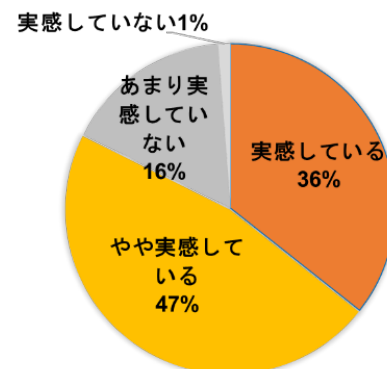
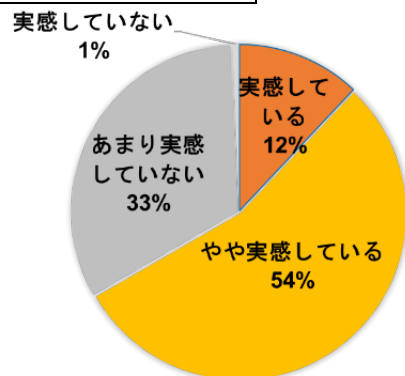
1年生保護者（452人/767人）回答率59%

主な結果

Q1：幼保小の架け橋期のカリキュラムの効果を実感していますか

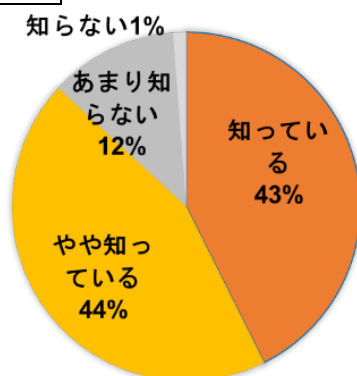
幼児教育施設教職員 前年度肯定率24%

小学校教員 前年度肯定率21%



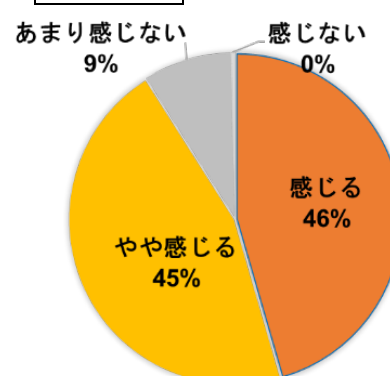
Q2：幼保小の架け橋期にどのような取組が行われたか知っていますか

小学校教員 前年度肯定率83%



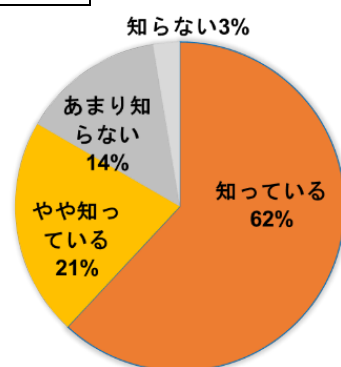
Q3：1年生はスムーズに小学校生活をスタートできたと感じますか

小学校教員 前年度肯定率86%

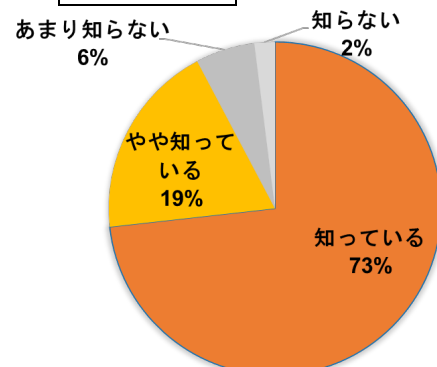


Q4：小学校入学に向けて、園と小学校が連携して取り組んでいることを知っていますか

5歳児保護者 前年度未実施

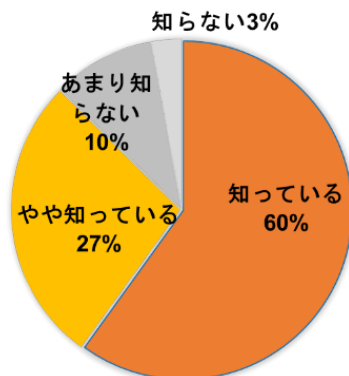


1年生保護者 前年度肯定率85%



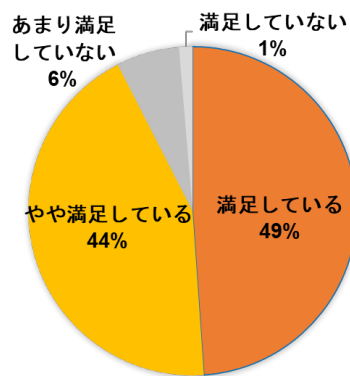
Q 5 : 小学校で4月から5月にかけて、時間割の工夫や遊びを通しての仲間づくりなどが行われたことを知っていますか

1年生保護者 前年度肯定率 70%



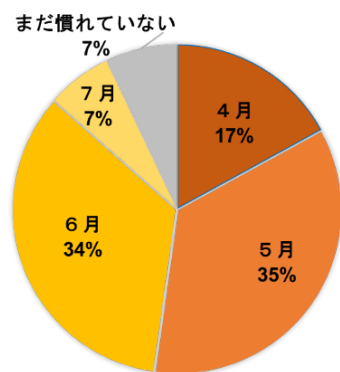
Q 6 : 小学校での4月から5月にかけて、時間割の工夫や遊びを通しての仲間づくりなどの取組に満足していますか

1年生保護者 前年度肯定率 85%



Q 7 : お子さんは、何月ごろに小学校生活に慣れたと感じますか

1年生保護者 前年度7月までの割合 86%



いずれの設問に対しても、肯定的な回答が昨年度を上回っている。

Q 1 の「カリキュラムの効果の実感」について、小学校教員は入学してきた子供の様子から実感できるのに対して、園では入学後の様子を見る機会が少ないことから、肯定的な割合が小学校より少ないことがうかがえる。Q 2 と Q 3 の結果からは、架け橋期の取組が 1 年生担任だけでなく教職員全体に理解され、円滑な接続の実感につながっていることが分かる。

Q 4 の「園と小学校の連携の理解」についての設問の結果から、5 歳児・1 年生の保護者も架け橋期の取組への理解が進んでいることが分かる。架け橋通信をはじめとするお便りやパンフレット、入学説明会での取組も効果があったと考えられる。また、Q 5 と Q 6 の結果から、1 年生の保護者が、スタートカリキュラムの具体的な活動を理解し満足していることがうかがえる。Q 7 の「小学校生活に慣れた月」についても、前年度より早い月の回答が多く、スタートカリキュラムの効果と考えられる。

6-2. 園・校における成果

＜先生方の指導と子供の姿の変容＞

1 園から小学校に対する「壁」の意識の軽減

従来は、小学校入学に際して小学校から園に依頼することが多く、園から小学校へはハードルが高く、依頼しにくい状況であった。本事業を通して、架け橋期の取組への理解が深まり、教職員の異校種参観・体験、幼保小合同会議や就学前教育推進会議におけるグループワークで顔を合わせて話し合う場が増えたことで、公立・私立を問わず、園から学校や公立・私立の園同士の壁が低くなり、気軽に相談できる関係が築けるようになった。

2 交流活動の充実

年間を通じて、5歳児と1年生、5歳児と5年生、5歳児同士の各交流や、小学校での授業参観や体験などが行われた。年度を追うごとに、内容の充実や、交流機会の増加、対象児の拡大が図られた結果、5歳児は、小学校入学への不安が軽減し期待感が高まった。小学生も、相手を思いやる気持ちが高まり自身の活動への達成感を味わうことができた。

3 1年生スタート期の登校渋りや泣いている子の減少

小学校入学に向けた園での保育・教育の充実や交流・体験活動の経験、入学後の時間割の弾力的・合科的な運用や、裁量の時間数を活用した「遊びの時間」などの実施により、従来1年生のスタート期に見られた、登校しぶりや不登校、離席といった行動が減り、ほとんどの子供が元気よく小学校生活をスタートすることができた。

4 小学校の学習活動の充実

1年生の学習では、担任が幼保小合同会議や就学前教育推進会議におけるグループワークで得られた情報を生かして、生活科を中心に園での経験を生かして学習活動を展開する場が増え、架け橋期の重点である「試したり、考えたり、伝え合ったりする」力を育んだ。

＜保護者の反応＞

1 交流活動の様子の参観から

「園から一人の入学で心配だった。今まで、こうした交流はなかったが、とてもいいことである。交流活動を通して安心できた。」「長子で、入学には不安がある。今日の活動は楽しかったようだ。」といった声が聞かれた。交流活動は、従来公立園のみを対象に実施することが多かったが、近隣の私立園や入学対象児全員を招くことで、子供と保護者の不安を和らげることができた。

2 入学直後のスタートカリキュラムの参観から

入学直後の様子を公開した小学校の保護者からは、「こうした参観機会はありがたい。自分の子も他の子の様子も知ることができた。」「1時間目の遊びの時間が園に近い活動で、子供らしさが出ていた。園と小学校のつながりを感じることができて安心。多くの保護者に見てもらえるといい。」といった声が聞かれた。

3 保護者代表の開発会議委員から

委員の子供が通う園の5歳児の保護者の気持ちの調査結果を報告いただいた。多くの保護者は「安全に登校ができるか。」「幼小のリズムの違いについていけるか。」「授業で座ってられるか。」といったことに不安をもち、1年生の担任には「子供の気持ちを尊重し、手助けをしてほしい。」「楽しい生活から始め、ゆっくりと見守ってほしい」といったことを望んでいるとのことだった。委員として、本市における架け橋期の取組の進捗状況を理解する中で、「園や学校の先生たちが円滑な接続のためにいろいろなことを考え実践してくれることで安心感が生まれた。特に、入学直後に友達と遊ぶ時間を設けたり柔軟な時間割を組んだりしたことが、子供が学校を楽しんでいる一因となっている。」「交流活動の様子を参観したが、園児が楽しめるだけでなく、小学生も満足感を味わうことができるとてもいい活動だった。他の保護者にも見てもらえるといい。」といった意見をいただいた。

7. 今後の課題と展望

今後の課題

- ・ 架け橋期のカリキュラムに示された資質・能力を育むために、教員や保育者のより一層の取組の理解と資質の向上が必要である。特に、幼児期の遊びと小学校の学びの接続に関する小学校教員の理解の向上と活動内容の質の向上が求められる。
- ・ 支援を要する子供に関する連携については、小学校教員（1年や支援級担任等）のより一層の事前参観と情報共有により、園での対応を活用しながら、指導や支援の工夫に努めていくことが求められる。
- ・ 交流体験活動は、入学児がいる全園を交流の対象にして、保護者の不安の軽減を図る。
- ・ 1年生の年度当初の表れから、円滑な接続はできてきたが、「試したり、考えたり、伝え合ったりする」力の育成を中心に、2年生以降も引き続き検証していく必要がある。
- ・ 就学前教育・保育の重要性について理解し、持続可能な取組となるよう組織と仕組みの確立が求められる。

令和7年度以降の取組

調査研究事業として取り組んできた令和6年度までの取組の成果と課題を生かして、推進体制を改善し、以下のような持続可能な取組を行う。

1 市の取組

(1) 架け橋プログラムの推進体制の改善

架け橋期の取組は、幼小中一貫教育の中で継続して推進する。統括校長会や各学園代表園長を加えた架け橋担当校長会で、取組の状況把握と成果・課題の明確化を進める。また、アンケートの実施と園・小学校の訪問による支援を行い、園長会・校長会や教育委員会内での進捗状況を共有する。

(2) 教職員の資質向上

就学前教育推進会議を「架け橋期の教育推進会議」と名称変更し、研修やグループワークによる校区ごとの協議を通じて、教職員の資質向上を図る。

(3) 情報発信

幼小中一貫教育や幼児教育の通信の発行を継続し、架け橋期の保育・教育や交流・体験事業の様子を、関係機関や保護者へ情報発信する。

2 園・学校の取組

(1) 袋井市版（学園版）「架け橋期のカリキュラム」に示された資質・能力を育む保育・教育の全園・全小学校での実施

園・小学校においては、経営案や教育・保育の全体計画に架け橋期の取組を明示したり、架け橋担当者を位置付けて担当者を中心に取組を進めたりして、カリキュラムを日常的に活用する。園・小学校での具体的な取組は、検証を通じて見直しを進める。

(2) 子供の交流・体験事業の充実

日常的な交流など子供の交流機会の増加や内容の充実、対象児・対象園の拡大を図る。

(3) 教職員の連携

幼保小合同会議を充実させ、スタートカリキュラムの参観と事後協議や交流や体験についての打ち合わせ・振り返りを行う。また、多様性に配慮し、インクルーシブの考えの下で生活や学びをしてきた支援を要する子供についての十分な情報共有と事前参観により、入学時の不適應の防止を図る。さらに、異校種参観や保育体験に加えて、園の保育研究への小学校教員の参加や小学校生活科の授業研究への園職員の参加により、架け橋期の子供理解と保育・教育の質の向上を図る。

8. まとめ

本市における幼小の接続については、小学校就学前の「遊び中心の保育・教育」から小学校入学後の「学習」へ移行する「段差」のほか、在籍する園による子供たちの生活体験や学びの経験の違い、さらには、特別な支援・配慮を要する子供や外国籍の子供の増加などにより、小学校1年時において登校渋りや離席等が多く見られるなど、必ずしも「円滑」な接続ができていたとは言えない状況であった。

このため、令和4年度（2022年度）から本事業（架け橋プログラム調査研究事業）に取り組み、「一人一人の多様性」「すべての子供たちの円滑な接続」をキーワードとし、関係者との議論を重ね、「育てたい姿」を明確にした上で、架け橋期カリキュラムの作成や各園・各小学校での実践・検証を行い、円滑な接続の実現に向け取り組んできたものである。

とりわけ本市においては、その地域特性などから、①私立園との連携・協力、②多様性への配慮について、意を配し進めてきた。

① 私立園との連携・協力

本市では、小学校就学前には公立園（13か所）よりも私立園（21か所）に通う子供の方が多い現状を踏まえ、また、本市が進める幼小中一貫教育では、私立園を各「学園」（中学校区）の“連携園”と位置付けていることから、私立園の参画を得てカリキュラムを検討するなど、「オール袋井」の実施体制に配慮した。

また、私立園を含む園、小中学校それぞれの教職員が、互いの保育・教育を参観・体験するとともに、様々な形で園児と小学生の交流活動を実施し、これらは、園児の入学に対する不安解消に加え、それぞれの保育・教育の理解促進や、園と小学校の「顔の見える関係づくり」にも資するものとなった。

さらには、推進組織である「架け橋期のカリキュラム開発会議」及び「ワーキンググループ会議」に、私立園の園長・教職員の参画を得て取り組んできたほか、組織的な対応とするため、幼小中一貫教育の推進組織に「架け橋担当校長会」を設置し、小学校の校長にも園、特に私立園との連携・協力を留意するよう働きかけながら取り組んできている。

② 多様性への配慮

小学校就学前の施設においては、子供たちの個々の状況を踏まえながら、障害や国籍等により分け隔てることなく教育・保育を進めてきている一方で、小学校との情報共有が必ずしも十分ではなく、入学後の支援・対応に課題が見られた。

このため、本事業において、特性がある、あるいは外国籍、さらには当該園から1人のみの入学するケースなどについて、園における配慮や支援方法等の小学校への引き継ぎの実証に取り組んだ。その結果、多くのケースにおいて、子供たちの戸惑いや困り感が軽減されたと思われる、小学校を訪問した園の教職員からも、小学校生活を楽しんでいる子供たち（卒園生）の姿に安心した、など肯定的な評価が数多くあり、あらためて、円滑な接続に向けた情報共有の重要性が感じられた。

3年間の取組を通じて、教職員や保護者の意識、就学前施設間の温度差など、改善が必要な課題があるものの、総じて言えば、私立園も含めて、円滑な接続に向け大きな成果を挙げることができたものと考えている。

今後は、この取組が、本市の幼小中一貫教育の中において、組織的な仕組みとして継続されるよう、各学園、各園、各学校の経営案に「架け橋期の接続」を位置づけ、それに基づき、保育・教育活動を実践するとともに、「幼児教育センター」を中心に、それぞれの施設はもとより、施設間の潤滑油として支援を継続していくほか、「架け橋期の教育推進会議」等において、架け橋期の取組状況や、何よりも子供たちの状況・あらわれを確認・評価し、継続的な改善に取り組んでいく。